



「笑顔とつながり」

永田台

サステイナブルスクール

No.529 2月号
横浜市立永田台小学校
TEL(714)4277
令和2年1月31日



進んであいさつ
笑顔あふれる
住みよいまちに

「自信」と「過信」

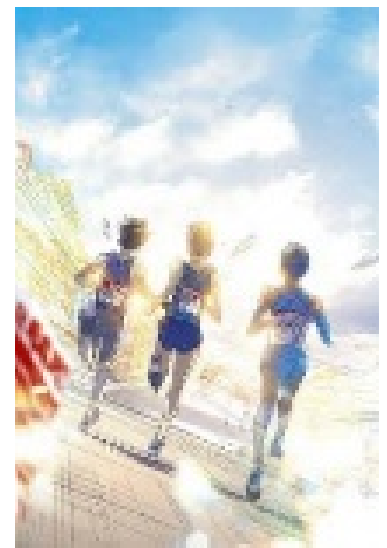
副校長 中村 宏

先日行われた「かがやき祭」では、多くの方にご来校いただき、生活科・総合的な学習の時間の学びの成果として、各学年・各クラスのテーマに沿った発表をご覧いただけたかと思います。その中で、多くの参観者の方が子どもとかかわり、称賛やアドバイスの声をかけてくださいました。本当にありがとうございました。

話は変わりますが1ヶ月程前、青山学院大学が箱根駅伝で2年ぶり5回目の総合優勝を果たしました。その中で、原監督が厳しくそしてあたたかく学生とかかわる姿を見て、私は「自信」と「過信」について考えました。

某大学陸上部の監督は、自分の現役時代の経験から選手に「自信」と「過信」を見極める力を付けさせたいと考え、指導にあたっているそうです。現役時代のことをこの監督は、次のように語っています。

『大学に入学する直前の2月、別府毎日マラソンのハーフに出場し、予想もしなかった日本最高記録で優勝してしまいました。高校生である私にとって、それがよくなかったのだと思います。自分は、大学でやっていけるのかという不安が、その優勝により払拭され、一気に「過信」が生じてしまいました。その後もトレーニングをしましたが、「過信」ばかりが先立っていては、力が付くはずもありません。案の定、大学1年の箱根駅伝では10区にエントリーされましたが、前日突然はずされました。監督は私の練習ぶりから「過信」を見抜いたのです。』



さて、私たち大人は、子どもとどのように関わっていけばよいのでしょうか。例えば、子どもたちが練習を重ね、「やれる」「できる」と信じて臨んだ行事で、よい結果が出なかったとします。「よくがんばった」「よかったよ」こんな慰めの言葉しかかけなかったとしたら、子どもたちは「過信」が崩れさっただけで、二度と次に向けた練習や学習に本気で取り組むことはないでしょう。「やれる」「できる」と信じて臨んだのであれば、きっと悔しいはずです。その悔しさから、「何が足りなかったのだろう」と考えさせ、気付かせるのが、私たちの役目であると思います。そして再びチャレンジしたときに、自分の成長を感じることができたなら、それがきっと「自信」につながるはずです。

また、努力をしているつもりになっている子ども、勝ち続け自分の力を「過信」している子どもに、それを気付かせるのも私たちの役目であると考えます。こうした役目を果たすには、子どもが努力しているその過程、進歩の跡を見逃さない。厳しくあたたかな眼差しが必要だと思います。

この監督は挫折を経て、今までの自分を省み、新たな挑戦を始めました。そして、大学2年生から4年生までの3年間、見事に箱根駅伝に出場したのです。

「かがやき祭」を通して、子どもたちの輝いている姿がたくさん見られた一方で、きっと悔しい思いをした子どももいるはずです。私たち教職員は、子ども一人ひとりが「自信」に満ち溢れ、輝く存在となるよう、支援・指導をしていきたいと思っています。子どものために、精一杯努力して参ります。今年度も残り2ヶ月ほどとなりましたが、家庭でのご協力ご理解の程、何卒よろしくお祈りします。